港津

して、加禮遠・蘇澳二港の外には、船舶の寄泊すべき所なし。北岸の東邊に突出するを鼻頭岬といひ、岬の東南を三貂角といひ、其灣を洩底灣といふ。三貂角は、明治二十八年五月、我軍の上陸したりし所にして、其最北端を富基岬といふ。西海岸は、多少屈曲をなして、小港灣なきにあらざれども、其水淺くして、大船を繫ぐに便ならず。西南岸に**サラセン**岬あり、遠く海上に出でて灣形を爲す、灣内に打狗港あり。本島の最南端を白沙岬又は南鼻と云ふ。其東方に南岬あり、左右相望みて南灣を抱けり。此海中は暗礁多くして航行頗る危險なり。

港津は、北海岸に基隆・淡水二港あり、南海岸にも、また安平・打狗二港あり。此四港は、開港場にして、内外の貿易盛に行はる。其他、西南の沿岸に、香山・六甲・鹿港・東港・社寮等の諸港あり。

島嶼

東西兩部

島嶼は、臺灣海峽に散布せる澎湖列島を以て、其最とす、其數五十餘島あり。就中、澎湖・白沙・漁翁の三島は、最大なる島にして、其中間なる一灣は、頗る碇泊に便なり。其他、南海上に小琉球島、東海上に紅頭嶼・火燒島・龜山島あり。

第三　地勢

本島の中央に一帶の山脈あり。北より南に亘りて、全島を東西兩部に分てり。其東部は、高山峻嶺多けれども、西部は概ね平坦にして、沃野數十里に亘れる所あり。

山脈

この中央山脈は、頗る高峻にして、數千尺の峰嶺を爲せり。中にも、新高山は、其高さ一萬二千八百五十尺に達し、富士山より高きこと、實に四百八十尺なり、是を我國第一の高山とす。此新高山と云へる名稱は、畏くも、今上天皇陛下の命名し給へる所なり。

河流

河流には、長大なるもの甚だ稀なり。其中にて稍大なるを淡水河とす。此河は、中央の山間より發し、基隆河・大姑陷河を併せ、北流して淡水港に注げり。其流程三十餘里にして、水利頗る多し。大甲河・大肚溪・虎尾溪・下淡水溪等は、之に次げる河流なり。

第四　氣候　產物

乾濕の兩季

氣候は、すべて炎熱なり。ことに、其南部は、熱帶に屬して炎熱最も熾なり。此島は、一年の中に、乾濕の兩季ありて、春夏は旱魃すれども、秋冬は雨多し。また一年中八九個月間は東北の定期風あり。時々猛威を逞くして、怒濤の沿岸地方を犯すことあり。

農產物

本島は、氣候の暖熱と水蒸氣の多量とに由りて、農產物の產額頗る多し。茶・砂糖・樟腦・石炭は、本島の四大產物と稱せられ、之に次ぐを米穀とす。茶は、一年に七回まで摘葉することを得、米は、一年に二回の收穫あり。其他、甘藷・藍・綿・煙草・落花生等を始め、熱帶地方の植物の蕃殖せざるはなし。金・

鑛物

銀・銅・硫黃・寶石等の鑛物も亦多し。

臺北

臺南

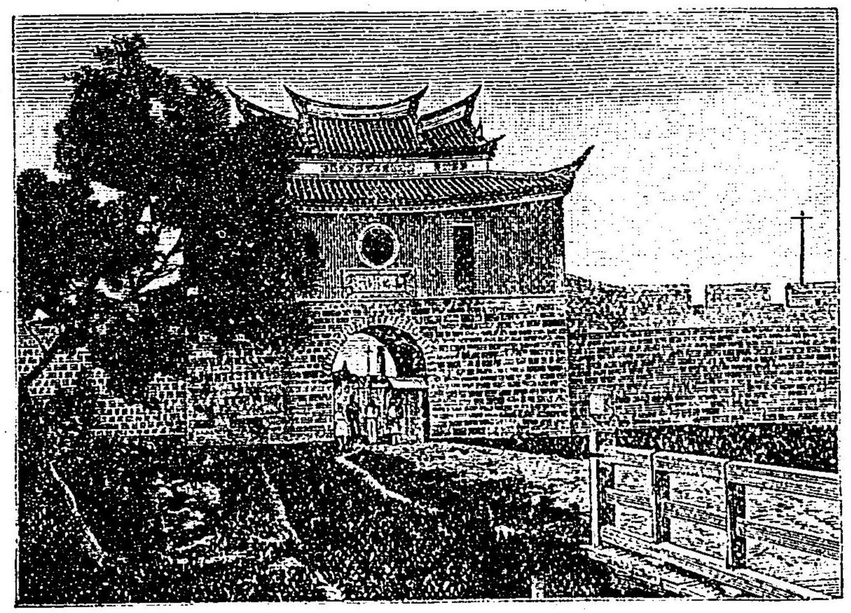
其他の都會

第五　都會

臺北は、淡水河の上流に在る都會にして、總督府及び臺北縣廳あり。郭外に艋舺・大稻埕の市街あり。

臺南は、安平港の東方にあり。本島第一の都會にして、昔時は本島の首府たりき。今は臺南縣廳あり。

其他、臺中・新竹・嘉義・鳳山は、縣廳の所在地にして、宜蘭・彰化・



臺北

九州地方の邊民

和蘭人及び鄭成功

清國

苗栗・雲林等は、其地方に於ける都會なり。

第六　沿革

本島は、上古より清國の附屬たりしにあらず、我戰國の頃には、九州地方の邊民此地に據りて、威を支那海上に振ひたることありき。其後、和蘭人來りて、之を占領したりしが、寛文年中、鄭成功來りて蘭人を逐ひ、本島に割據せしも、其孫の代に至りて、遂に清國に併せられたり。明治四年、琉球の人民此土に漂著して、本島の蕃人に虐殺せられたるを以て、其七年に至り、我邦より問罪の師を發して、是等蕃人を征服し、遂に清國より償金を納れて、平和の局を結びたり。二十七八年の役に、清國、本島を我に割讓して和を乞へ

り。是に於て、本島は、全く我有に歸し、蕃民もまた皇澤を被るに至れり。

本島の住民

現今、本島の人民は、概ね清國より移住したるものにして、舊來の土人は、東部の山谷間に棲息す。此土人の稍、開化したるを熟蕃と稱し、未だ開化せざるを生蕃と稱す。生蕃は、兇暴にして生活の度極て卑し。

中等小地理　本邦之部　終

廳府縣別人口戶數面積表

廳府縣名	現住人口	現住戶數	管內面積	一方里平均人員
東京府	一、九四八、五八一人	四一三、四七三戶	一二五、八〇方里	一五、四九〇人
京都府	九五七、二六〇	一九一、〇七〇	二九六、五五	三、二二八
大阪府	一、五〇三、七七一	二八七、三四七	一一五、七二	一二、九九五
神奈川縣	八七〇、二五六	一四六、七〇四	一五五、六七	五、五九〇
兵庫縣	一、六五二、三六六	三二九、一一三	五五六、六八	二、九六八
長崎縣	八四五、四四一	一五六、八二〇	二三五、一五	三、五九五
新潟縣	一、七三三、六二九	二八八、八七六	八二四、五九	二、一〇二
埼玉縣	一、一五二、八二三	一七九、二一〇	二六五、九九	四、三三四
千葉縣	一、二四五、八七四	二一一、三〇一	三二六、一五	三、八二〇
茨城縣	一、一一五、二六九	一八二、三五二	三八五、一八	二、八九五
群馬縣	八〇六、二七七	一三四、二八二	四〇七、二五	一、九八〇
栃木縣	七九八、九四六	一二一、四四一	四一一、七七	一、九四〇
奈良縣	五二四、五六二	八九、五二四	二〇一、四二	二、六〇四

三重縣	九六七、四〇六	一七六、六〇四	三六八、五五	二、六二五	
愛知縣	一、五九二、七三三	三三二、二六八	三一二、七八	五、〇九二	
靜岡縣	一、一七五、九八二	二〇八、八二八	五〇三、八二	二、三三四	
山梨縣	四九二、六八九	八二、六七六	二八九、八五	一、七〇〇	
滋賀縣	六八八、三四三	一三一、三五一	二五八、四四	二、六六三	
岐阜縣	九六〇、七一三	一八一、三七九	六七一、四五	一、四三一	
長野縣	一、二三一、八五九	二三〇、〇九九	八五三、七六	一、四四三	
宮城縣	八三三、一一三	一二一、〇〇五	五四〇、七九	一、五四一	
福島縣	一、〇六一、〇一三	一五九、〇六七	八四六、〇七	一、二五四	
岩手縣	七〇二、七五〇	一〇九、三九五	八九九、一九	七八二	
青森縣	六〇〇、二九四	九一、四〇八	六〇七、〇三	九八九	
山形縣	八一一、〇三九	一一九、四九〇	六〇〇、一五	一、三五一	
秋田縣	七五七、〇四一	一二五、〇二九	七五四、〇〇	一、〇〇四	
福井縣	六一二、六二〇	一一五、二一四	二七二、四〇	二、二四九	
石川縣	七四九、七七五	一三四、二四九	二七〇、七二	二、七七〇	
富山縣	七五四、七九九	一四五、一七八	二六六、四一	二、八三三	
鳥取縣	四一二、九六五	七九、三四五	二二四、一六	一、八四二	

島根縣	七〇九、〇六五	一四六、四六八	四三五、八二	一、六二七	
岡山縣	一、一〇八、三九三	二二三、四七二	四二〇、九八	二、六三三	
廣島縣	一、四〇五、六七四	二八一、一七六	五二〇、七八	二、六九九	
山口縣	九六一、〇六五	一九三、四七六	三八九、九九	二、四六四	
和歌山縣	六五六、〇二五	一二〇、四九七	三一〇、六二	二、一一二	
德島縣	六七六、六九四	一二二、七一八	二七一、二八	二、四九四	
香川縣	六七六、六八一	一二七、五七七	一一三、五〇	五、九六二	
愛媛縣	九七一、九五五	一八八、七六七	三四一、一七	二、八四九	
高知縣	六〇九、〇〇五	一二二、五四四	四五四、七二	一、三三九	
福岡縣	一、三五七、七七七	二三六、九二九	三一七、八一	四、二七二	
大分縣	八一九、九九六	一五三、二一〇	四〇二、七三	二、〇三六	
佐賀縣	五九九、六七九	一〇三、二二五	一六〇、〇八	三、七四六	
熊本縣	一、一二二、〇六八	二一五、九一五	四六五、四七	二、四一一	
宮崎縣	四五五、五三五	八六、五九〇	四八七、三四	九三五	
鹿兒島縣	一、〇八三、七四五	二〇七、四六一	六〇二、三一	一、七九九	
沖繩縣	四四九、一一二	八九、九四三	一五六、九一	二、八六二	
北海道廳	七五五、八三七	一六四、四〇八	六、〇九五、三六	一二五	

臺北縣	五二三、〇一三	八四、八四五	二、二六〇、四二	一、二一〇
新竹縣	三二一、五八七	六一、四九八		
臺中縣	五一一、八六二	一〇、八一七		
嘉義縣	五九四、四五三	一二六、一九六		
臺南縣	一九九、九七二	四三、九二二		
鳳山縣	四〇三、二五五	八四、一五八		
宜蘭廳	一一〇、〇〇七	二一、八五三		
臺東廳	八〇、九八九	一五、八三八		
澎湖廳	五二、四〇五	一〇、五九一	八、二二	六、三七五

（備考）本表ハ第十八統計年鑑ニ據ル但シ臺灣本島ノ生蕃人大凡二十萬人ハ此表ニ算入セズ

陸軍配置表

師團	同上司令部所在地	同上所屬兵種	旅團	同上司令部所在地	聯隊	同上配備地	聯隊區司令部所在地
近衛	東京	騎兵一聯隊 砲兵一聯隊 工兵一大隊 輜重兵一大隊 鐵道大隊	第一	東京	第一	東京	本郷
					第二	東京	宇都宮
			第二	東京	第三	東京	佐倉
					第四	佐倉	水戸
第一	東京 （附屬東京灣要塞砲兵横須賀要塞砲兵）	騎兵第一聯隊 砲兵第一聯隊 工兵第一大隊 輜重兵第一大隊	第一	東京	第一	東京	麻布
					第二	東京	横濱
			第二	東京	第三	高崎	高崎
					第十五	松本	長野
第二	仙臺	騎兵第二聯隊 砲兵第二聯隊 工兵第二大隊 輜重兵第二大隊	第三	仙臺	第四	仙臺	仙臺
					第十六	新發田	新發田
			第十五	新發田	第廿九	仙臺	福島
					第三十	村松	柏崎
第三	名古屋	騎兵第三聯隊 砲兵第三聯隊	第五	名古屋	第六	名古屋	名古屋
					第十八	豐橋	豐橋

		工兵第三大隊	輜重兵第三大隊	第十七	豐橋	第三十三	第三十四	靜岡	名古屋	靜岡	津
第四	大阪	附屬（由良要塞砲兵）	騎兵第四聯隊	砲兵第四聯隊	工兵第四大隊	輜重兵第四大隊	第十九	伏見	第三十八	第三十七	第九	大津	大阪	大阪	和歌山	京都
第五	廣島	附屬（吳要塞砲兵）	騎兵第五聯隊	砲兵第五聯隊	工兵第五大隊	輜重兵第五大隊	第廿一	山口	第四十二	第四十一	第二十一	濱田	廣島	廣島	尾道	濱田	廣島	山口
第六	熊本	附屬（佐世保要塞砲兵）（對馬警備隊騎兵）	騎兵第六聯隊	砲兵第六聯隊	工兵第六大隊	輜重兵第六大隊	第廿三	大村	第四十五	第四十六	第二十三	熊本	第十一	熊本	宮崎	鹿兒島	熊本	大村
第八	弘前		騎兵第八聯隊	砲兵第八聯隊	工兵第八大隊	輜重兵第八大隊	第十六	秋田	第三十二	第三十一	第十七	秋田	第五	弘前	弘前	秋田	弘前	山形

第九	金澤	騎兵第九聯隊	砲兵第九聯隊	工兵第九大隊	輜重兵第九大隊	第十八	敦賀	第三十六	第三十五	第十九	第七	金澤	鯖江	金澤	富山	岐阜	鯖江	金澤
第十	姬路	騎兵第十聯隊	砲兵第十聯隊	工兵第十大隊	輜重兵第十大隊	第二十	福知山	第三十九	第四十	第二十	第十	姬路	姬路	福知山	鳥取	鳥取	神戶	姬路
第十一	丸龜	騎兵第十一聯隊	砲兵第十一聯隊	工兵第十一大隊	輜重兵第十一大隊	第廿二	松山	第四十四	第四十三	第二十二	第十二	丸龜	丸龜	松山	丸龜	德島	松山	高知
第十二	小倉	附屬（下ノ關要塞砲兵）	騎兵第十二聯隊	砲兵第十二聯隊	工兵第十二大隊	輜重兵第十二大隊	第十二	小倉	第二十四	第四十七	第十四	小倉	小倉	福岡	小倉	大分	福岡	佐賀
第七	札幌	屯田歩兵第一大隊（札幌）	同第二大隊（空知）	同第三大隊（上川）	同第四大隊（根室）	第廿四	久留米	第四十八	第四十七	第二十四	第十四	久留米	久留米	小倉	大分	福岡	佐賀	

海軍區々劃表

鎮守府	同上所在地	區域	海岸延長里程	軍港
第一	横須賀	陸中國南九戸北閉伊郡ノ界ヨリ紀伊國南牟婁郡東牟婁郡ノ界ニ至ルノ海岸海面及ビ小笠原島ノ海岸海面	一、〇五七浬	相模國三浦郡横須賀港
第二	吳	紀伊國南牟婁郡東牟婁郡ノ界ヨリ石見長門ノ國界ニ至リ又筑前豐前ノ國界ヨリ九州ノ東海岸ニ沿ヒ日向國南那珂郡南諸縣郡ニ至ルノ海岸海面及ビ四國ノ海岸海面並ニ内海	二、〇六七浬	安藝國安藝郡吳港
第三	佐世保	筑前豐前ノ國界ヨリ九州ノ西海岸ニ沿ヒ日向國南那珂郡ト南諸縣郡トノ界ニ至ルノ海岸海面及ビ壹岐對馬沖縄諸島ノ海岸海面	一、四九七浬	肥前國東彼杵郡佐世保港
第四	舞鶴（但未開廳）	石見長門ノ國界ヨリ羽後陸奥ノ國界ニ至ルノ海岸海面及ビ隱岐佐渡ノ海岸海面	一、〇五五浬	丹後國加佐郡舞鶴港
第五	室蘭（但未開廳）	北海道陸奥及ビ陸中國北九戸南九戸兩郡ノ海岸海面	二、二七六浬	膽振國室蘭郡室蘭港

（備考）第四、第五ノ兩鎮守府ハ未ダ開廳ニ至ラザルヲ以テ當分ノ内第四海軍區中越後以東及ビ第五海軍區ヲ横須賀第一鎮守府ニテ支配シ又第四海軍中越中以西ヲ吳第二鎮守府ニ於テ支配セリ

明治三十三年十月八日印刷
明治三十三年十月十日發行

中等小地理　本邦之部
定價金五拾五錢

編纂者　文學社編輯所

發行兼印刷者　東京市日本橋區本町四丁目十六番地　小林義

發兌　東京市日本橋區本町四丁目十六番地　文學社

印刷所　東京市神田區錦町三丁目一番地　文學社工場

大賣捌所　全國各府縣特約書林

著作權登錄濟

文部大臣伯爵樺山資紀君題辭
錦鶏間祇候帝國教育會長辻新次君序
米國エール大學哲學教授ドクトル、オブ、ディヴィニティー、ドクトル、オブ、ロース、ジー、ティー、ラッド君講述
東京專門學校講師浮田和民君通譯
帝國教育會編纂

◉教育學ニ應用シタル心理學　全一冊　菊判總クロース　定價金九錢拾
東京帝國大學文科大學教授ドクトル、オブ、フィロソフィー、文學博士中島力造君校閲並序

高等師範學校教授波多野貞之助君閲
同教諭小山左文二君著
◉教授法汎論　全一冊　定價金四拾錢

前高等師範學校講師長谷川乙彦君著
◉新教育學大綱　全一冊　定價金五拾五錢

◉教授法各論　全一冊　定價金五拾錢

文學士笹川種郎君編
◉新中學日本史　二二用年　全二冊　定價金九拾錢

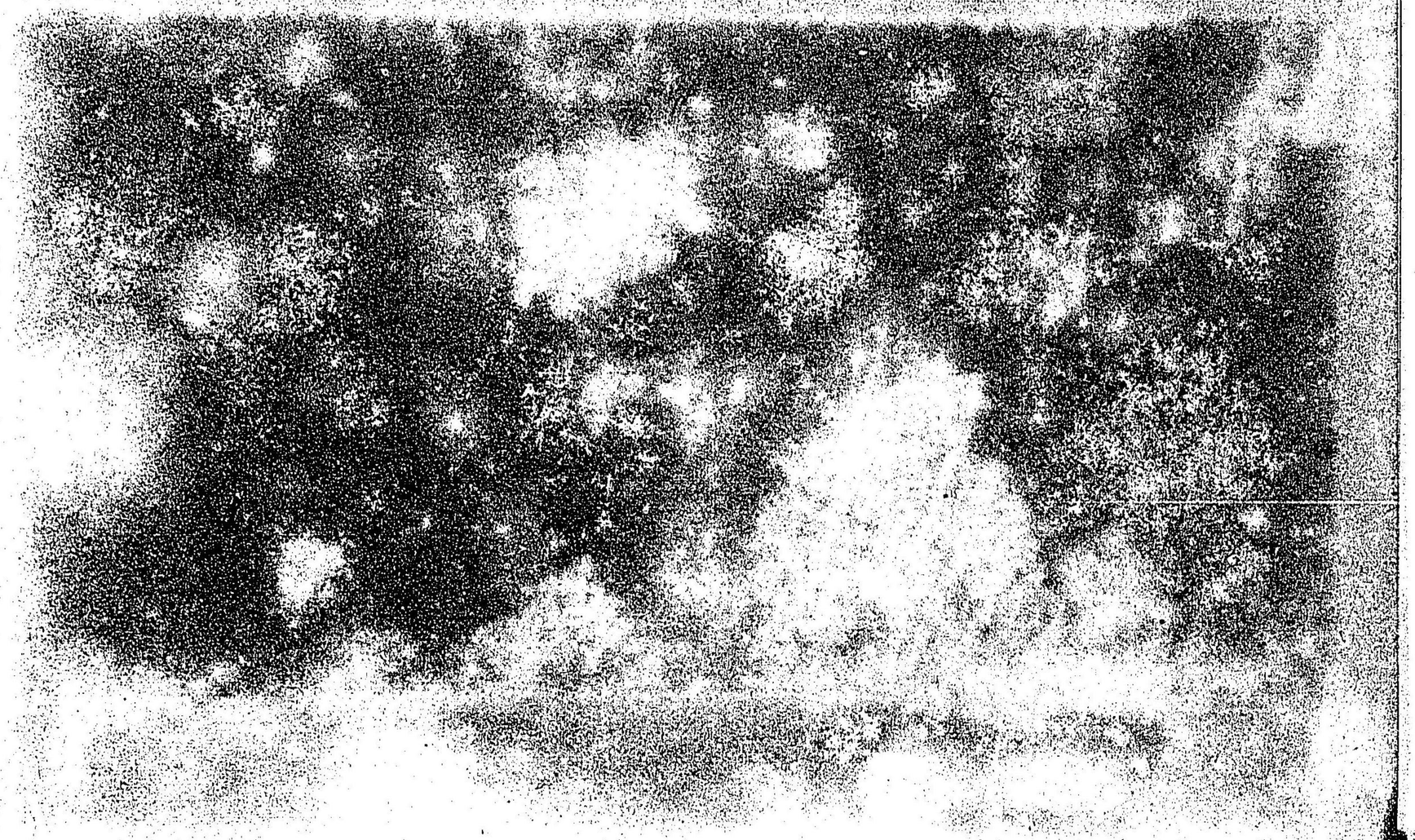
文學社編輯所編纂
◉中等小地理　全三冊　本邦　定價金五拾五錢　外國　定價金六拾錢　地文　近刊

2116
2
44

310166-001-0

特20-305

中等小地理　本邦之部

文学社編輯所　編

M33.10